

令和3年度第2回京都府総合教育会議

- 1 日 時 令和4年1月24日(月)午後1時30分から3時00分まで
- 2 場 所 京都産業大学むすびわざ館3階 3-A教室
- 3 出席者 西脇知事、橋本教育長、小畑教育委員（教育長職務代理者）、
千教育委員、安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員
- 4 次 第
 - (1) 開会
 - (2) 意見交換
 - (3) その他
 - (4) 閉会

1. 開会

○出席者紹介

○知事あいさつ

本日は皆さんお忙しいところ総合教育会議に御参加いただきまして、誠にありがとうございます。心から御礼を申し上げます。

今、オミクロン株の第6波で非常に感染が急拡大しており、先週は大阪、兵庫と3府県の知事と会議の上、連名で、まん延防止等重点措置の適用を要請しましたが、併せてオミクロン株の特性に合わせた有効な措置が取れるように、基本的対処方針を改定するように、ということも申入れをいたしました。

ではどうしたらいいのかと言われても正解がないのですが、いずれにしても基本的な感染防止対策が有効だと言われております。我々もワクチンの3回目接種ほか経口薬の準備、病床の準備を含めて万全の体制を取りたいと思っておりますので、引き続きの御協力をよろしく申し上げます。

それから、ここに来て若い人の感染が非常に拡大しておりますので、学校教育現場も非常に大変だと思っております。クラブ活動、校外での活動も含めて、また、休校・学級閉鎖等の措置もあります。それから、特に若年、保育園、幼稚園等でも非常にたくさんの感染者が出ておまして、非常に御迷惑をおかけしておりますが、何とかここは乗り切るしかないと思っておりますので、よろしく願いいたします。

前回は若者への就業支援ということがテーマで、非常に貴重な意見をいただきありがとうございました。今回は2022年度中にいよいよ文化庁が京都に移転してまいりますので、「文化庁移転を機とした文化施策の推進」をテーマに、ということでございます。昨年度も実は「京都の文化力を生かした教育」をテーマに懇談していただきまして、非常に多くの意見をいただきましたが、いよいよ文化庁が参りますので、そうしたことも踏まえて、今日もまた引き続きいろんな提言をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○橋本教育長あいさつ

それでは、教育委員会を代表して私の方からも一言御挨拶を申し上げます。

今もお話でしたが、現在は府立学校においても児童生徒、教職員のコロナ感染者が急増しており、この間、部活動に起因するクラスターも複数発生しております。

その一方で、この時期は子供たちにとって大変重要な時期であることから、部活動等一定の学校教育活動についての制限をかけるとともに、マスク着用や手洗い、換気といった従来からの感染症対策を徹底し、子供たちや教職員の感染を防ぎながら可能な教育活動の継続を図れるようにしていきたいと考えております。また先日、府立中学校の入学選抜は無事終了できましたが、2月からはよいよ高校の入学選抜も始まりますので、これについては様々な事態を想定しながら適切な運営に努めてまいりたいと考えております。

さて、教育委員会におきましては、現在令和4年度から10年間の府立高校の方向性を示しました府立高校の在り方ビジョンの策定を進めており、今日の午前中も最終回の検討会議を終えた訳ですが、この間実施してきました中間案に対するパブリックコメントの中では、府立高校ならではのスケールメリットを生かした教育活動への期待の声等が寄せられております。今後、府民の期待に応えられるような魅力ある府立高校づくりに努めてまいりたいと思っております。

今日のテーマは「文化庁移転を機とした文化施策の推進」であります。昨年3月に策定しました第2期京都府教育振興プランにおいても、京都の強みである文化と文化財の保存、継承、活用を一つの柱として新たに位置づけております。

京都の文化力を生かしながら、子供たちの発達段階に応じてふるさとの文化を愛し育てる教育を進めていくことが重要であると考えており、これまで以上に力を入れて取り組んでいきたいと考えております。西脇知事にこうした府教委の取組への御理解と御協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○「文化庁移転を機とした文化施策の推進について」～概要説明

(文化スポーツ部 佃部長)

(教育委員会 吉村指導部長)

○意見交換

(西脇知事)

それではまず昨年度ですが、一昨年(2021年)の11月に開催したこの会議で、「京都の文化力を生かした教育」というテーマで、そのときに皆さんからは例えば国際人としては自らの歴史とか文化を学ぶ必要性が増してきているのではないかと、生活文化を継承することが非常に難しくなっているとか、小さいうちから本物に触れることが重要だということで、鈴鹿委員から

御自分の赤ちゃんに抹茶を飲ませている話を聞かせていただきました。それから後は、自分自身の生まれ育った地域のアイデンティティとか、文化に対して自信を持てるような教育が必要ではないかということで、様々な御意見やアイデアを頂戴いたしました。そこで、今日は文化庁移転もそろそろ目前に迫ってまいりましたので、「文化庁移転を機とした文化施策の推進」というテーマで、今教育委員会の方から説明がありました文化財も非常に大きい関係はあるのですが、そこに入ると文化庁行政の話だけになるので、今回は特に3点についての意見を頂戴したいと思います。

1つ目は子供たちの地域の伝統文化の学びとか、要するに子供たちが地域の伝統文化を学び継承すること、2つ目は子供たちの京都の生活文化の学びについて、3つ目は伝統産業、ものづくりの担い手についてということで、どちらかという教育に重きを置いたテーマです。

それともう一つは我々も中々いい知恵がないのですが、文化庁が来ますが、文化庁とは国の役所なんですね。だから、京都のためだけに来るということでないのは間違いないのですが、では、文化庁が京都に来ることをどう生かしていくのか、できれば何か国の機関が来るということについて絡めてアイデアをいただければありがたいと思ってます。

まず、1点目の子供たちの地域の伝統文化の学びの継承です。文化庁が平成29年度に全国調査したときには、小・中学校で文化芸術鑑賞や体験機会をどちらかでも提供している割合というのが65.5%で、これまでに実施されなかったことが16.8%もあったということで非常に少ないです。それから全国の小学校で舞台芸術鑑賞を行っていない割合というのが京都府内で36%で、全国平均の27%より多いと、京都でそれをやってないみたいな状況があります。これは2020年度、2021年度はコロナということで全国的に全く数が違うんですけれども。

先ほど文化スポーツ部長から紹介があった京都府の伝統文化体験フェスティバルとか、全国高校生伝統文化フェスティバルみたいなことはやっており、私自身もこの文化フェスティバルに出ています。この2年間は実はハイブリッドになって、もう一つ全国から集まってこれないのです。これらはもともと京都府がやっていたのですが、文化庁が京都に移転するということで、今は文化庁と京都府が主催しています。文化庁が全国的な伝統芸能の甲子園みたいにしたかったこともあってそうなっているのですが、これも中々参加する学校が限られていることもありますし、それから学校とか教員の方々を対象に、文化を未来に伝える次世代育み事業というのをやっていて、これは教員の方にもいろんなことをやっているんですが、ここも非常に一部に関心の高い先生がおられる学校に限られているということもございまして、今後どうアプローチしていったらいいのか、どうやっていけばもっと子供たちに地域の伝統文化の学びができるのかということについて、ぜひ御意見を賜ればということをおっしゃっていますので、よろしく願いいたします。

(小畑委員)

文化庁が来る意義をおっしゃったのですが、私はやはり文化庁がせっかく京都に来るのであれば、その文化というものを軸にして、どうやってその地域なり地方なり、府民が成長していくかということを考えていくというか、文化とその産業政策という訳でもないですけども、文化が地方や地域や国の成長にどうやったらつながっていくかということを考えていくような、施策を作っていくいい機会なのではないかと思っています。

なぜならば京都というのはまさに文化を軸にして成長し続けているまちだからです。だから、そういうところに文化庁が来るのだから、そういう循環というものをしっかりと作っていくようなことをしていく必要があると、そうすると文化と産業ということが軸になる訳です。その間をつないでいるのが私は教育ということではないかと思っています。それで、そういうことでいうと文化と一くくりで言えますけれども、私は2つの概念があるのではないかと思っています、1つは有形無形の文化財ということです。こういうものをそれぞれの地域でも掘り起こして、それでこういうものがあつたのだなということをもみんなが理解して共有化していく。しかし、こんなすばらしい文化財、有形無形の文化財が私たちの地域にもあつたのだと思っても、それだけでは地域の活性化にはつながらないです。これをその地域の活性化につなげるためには、もう一つの文化というのが必要で、それは地域文化というようなもので、地域文化というのは、よく企業文化ということを言いますが、企業文化というのは、その企業が成長していくための方程式みたいなことです。規範である行動規範であつたり理念であつたり、考え方だつたり行動様式だつたりします。そういう方程式が、時代にマッチしたものを企業が持てば成長できる。地域というのは組織とはちょっと違うから、同義語ではつながらないと思いますが、やはり地域が文化を中心に軸にして成長していくためには、その地域文化というか、地域の成長の方程式みたいなものをしっかりと皆が認識していく必要があります。

例えば京都というまちで言えば、非常に高質な文化というのがあつて、それに引きつけられるようにしていっぱい人が集まつて、集まつた人が産業を起こして、起こした産業が富を産んで、それが文化をさらに磨いて、それがまたさらに人を呼び込むというように、そういうサイクルで成長してきていると思うのですが、まさにそういうサイクルそのものが地域文化というか、京都のまちの文化というか、そういうような概念です。それで京都のまちというのは比較的そういうものが、みんながそういうことを理解して、そういうものをうまく回してきて、今も成長している訳ですが。

例えば過疎地の地方等に行くと、過去は非常に活性化していたときがあると。だけど今は衰退してしまつたと、過疎で。そういうところに行くと、そういう地域文化みたいなものをみんな見失っているのではないかと。だから、そういうものをもう一回、その有形無形の文化財を掘り起こすだけではなくて、そういうものがどういう歴史的な背景で生まれたのかとか、過去にその地域が非常に活性化していたときは、そういう文化財というものをどのように生かしながらやってきたのかとか、そういう歴史みたいなものを勉強して、その地域の成長の方程式である地域文化というものをみんながもう一回、気がついていく。それが今の

時代にはなかなか合っていないから成長してないんだと思うんです。それでは今はどうしたらいいのか、その文化をどう変えていったらいいのかというようなことを学習というか、みんなで考えていくと。これは小学校、中学校、高校でもそういうテーマで、実際にフィールドワークしながらいろんな人の話を聞いて、歴史をひもとくという点で文化財を掘り起こしてやっていく。これはPBLです。まさに課題解決型の学習ですが、それだけでは駄目で、そこから出てきたいろんなアイデアとか方程式みたいなものを今度は行政が受け止める。あるいは地域の会社とか、農業をやっている人が受け止めて、面白いなと思ったところは、その政策とか施策とかを経営に反映させていく。そうすると地域のそういう成長の方程式である地域文化というものが産業の成長につながっていくと。そうすると文化と教育と産業の成長というものがもっと回り出すのではないかと。こういうことで、そこまで行けば、このPBLも本当に素晴らしい真の課題解決型の教育というものになっていくのではないかと、こういうふうに思っていて、だからそういう教育をしっかりとみんなで、小・中・高でやっていったらいいと思っています。

それでさっき教育委員会の課題例で、文化財を活用して地域の地域を活性化させるにはどうしたらいいのかということをお小の学校の段階で考えていきたいと思いますというものがありましたが、これをもう少し突っ込んでやっていくと。もちろん小学校だけじゃなく、中学、高校でもそれぞれにやっていくと。するといろんなアイデアが出てきて、それを行政も受け止めて、その意義を受け止めて、そして文化と産業を教育にくっつけて地域の活性化につなげていくと。そうすると文化庁の意味も出てくると思うので、そういうようなことを考えております。

(安岡委員)

ちょうど京都にこの文化庁が配置されるということで、この機に思い切り動くことができればいいなと思う訳ですけど、それまでに京都というのはそういった歴史が非常にあって、その中でももう既に仕掛けづくりというのはやっているのではないかなと思う訳です。

この中での全国高校生伝統文化フェスティバルですが、これも京都が先頭に立っており、素晴らしいことですが、文化庁移転に伴って京都の全ての高校が参画できるようにしていかなければならないでしょう。出場しなくてもそれを共有するというのが、その高校の中で共有するというのが非常に重要になってくるのではないかなと思うところです。

その中において舞台芸術鑑賞会をやっていない割合が全国平均より少し高いというのは、いささか心もとない気もする訳で、こういったことに関しては解消すべき課題であろうかと思っております。

昨年10月に府立の嵯峨野高校にスクールミーティングで行かせてもらったときに、源氏物語についての京探索みたいな形で京・平安文化論ですか、こういった形でやっていた訳です。スタンプラリーをやったり、その印刷会社を巻き込んだり、それで和菓子を作って和菓子屋さんの会社を巻き込んだりとかいうことで、周りを巻き込んだ中での施策というものが

非常に重要になってきているなと思う訳です。

これが今の状況が回復して、また国外の人たちが京都に集まったときにも、例えばホテルとかそういった中で、生徒たちがやることを展示したり、あるいはその工芸品とかで作ったものを見せることによって、京都の玄関口の中で京都らしさをすぐに分かるような形、ぱっと見て京都に降り立った瞬間に、ああ京都だなというような形を、京都駅を含めて、そういう玄関口に作る必要があるのではないかと考えています。

そのためには予算というのが非常に重要になってくる訳で、日本の国の世界に占める文化予算が非常に低いというようにも聞いておりますし、そういった中で予算立てというのが必要とは思っております。

(鈴鹿委員)

私からは、今お話を聞かせていただいて、最初にこの文化のことについてと、後、続いて挙げていただいた観点のことの一文についてお話しさせていただければと思います。

まずこの文化は本当に、安岡委員がおっしゃったようにいろいろな仕掛けをされているなと思いました。それは教育委員会でもですし、文化庁としてもされている。ただ、問題として、先ほど知事がおっしゃったような高校生伝統文化フェスティバルに出る学校に限られていたりするという問題点、これはどうしてかと考えておりましたら、文化というのは一部で勝敗があるものもあるのですが、特にお茶とかでもそうですが、勝ち負けというのがある世界ではないので、学校的に例えばインターハイで、このスポーツでいいですよというのと違って、アピールがしづらいというのも一つあるかなと思います。

ただ、学校としてそれをしづらいというのもありますが、生徒の方としても何位だったんだよというのが言えないというのものもあるのかなとは思っているのですが、やはりその文化に対して格好いいという憧れるような気持ちがあれば、どんどん興味が深まっていくのかなと思います。例えば、もちろん前回に述べさせていただいた本物に触れるというのは大事ですし、最終的にそこは絶対必要なのですが、スターターとしてはどんな導入でもよく、主役はやっぱり子供なので、大人に対してのアピールではなく、例えば漫画でそのものがはやったら、やはり格好いいとなる。「ちはやふる」という漫画がはやったときは百人一首が格好いいなったり、また源氏物語の世界でも、私たちの世代は「あさきゆめみし」という漫画で勉強しました。ですので、その世代の人は全員、内容をある程度は分かるというのは実際にありますし、こういうスタートとして入ることで、主役は子供なので、それを漫画だからといって排除するのではなく、初めはこういうことで、コラボレーションまではいかないですけども導入していったら、そこから継続していくというのは大事なことはないかなと思いました。

続いて何点か挙げていただいた部分についてなのですが、これは質問になってしまうのですが、子供のための地域連携事業の、地域の方を巻き込んでの京のまなび教室の開設なのですが、これは地域の方には何か予算を組んで還元しているのでしょうか、それともこれは

ボランティアという形なのでしょうか、もし分かるようでしたら教えていただければと思います。

(片山社会教育課長)

京のまなび教室の関係で、地域の方に御参加いただいて実施しているものですが、基本的には教育委員会主催の事業ということになりまして、ボランティアであっても報酬、謝金等は出させていただきます。

(鈴鹿委員)

ありがとうございます。これはもちろん地域の方も知っていただきたいという思いがあるのですが、完全にボランティアになると地域によって差が出過ぎてしまうのと、継続ができない場合があるので、安岡委員からも予算が大切というお話がありましたが、きちんとこれを継続していく予算を取って、地域と連携事業というのも進めていくのが継続につながっているのではないかなと思いました。

(藤本委員)

この伝統文化ということに対しての教育、学校教育が果たす役割というのはやはりすごく大きいと思うのです。それでこれを単に地域のことを学ぶという、割と安易な取り組み方をするのではなく、なぜ京都の府立高校、府立学校でこういう伝統文化について授業の中で学んでいくかということをしつかり目的、その背景を、みんながどれぐらい真剣に共有するかということも大事なのかなと思います。

そのことが学校現場で様々な体験学習とか、そういうことを実践していく実績につながっているのかなと思います。つまり今はその辺がしっかり皆さんの学校現場の中で問題意識として共有化されていないことが一つあるのではないかなと考えます。

といいますのは、言うまでもなく日々の月例の定例委員会にも上がってくるように、学校現場は非常にいろんな問題に皆さんが追われている毎日ですので、ともすると授業で決められている、カリキュラムで決められている、教科書に載っていることをこなすのが精いっぱい、こういうような伝統文化に対する体験等の取組が何か面倒くさいみたいな、余計なおまけのような感覚で捉えられていたらやはり何にもなりません。ぜひその辺りは特にこの京都府において伝統文化をなぜ幼少期に学ぶ必要があるのかということをしつかりと学校現場が理解し、それを各家庭、保護者にも理解を求めていくこと、そして当然、様々な年齢の子供たちにもそのことを分かりやすく伝えていくという、今はそういう教育の方からの発信というものが非常に大事なのではないかなと思います。

それと、例えば学びとしては、算数もやらなければいけない、国語も社会もと、その中でまた伝統文化というのではなくて、今は世界の教育というのが総合的な学習、いわゆるプロジェクト・アプローチと言われるような協働的な学びという手法が非常に注目されている

と思います。例えばこの間、嵯峨野高校のこすもす科の皆さんが英語を共通言語として使いながら、やっていく内容は京都の伝統文化、源氏物語といった、何かそのような、科目を超えた中で、その伝統文化が自然と触れ合えるような、今の最新のICT等も用いながら、子供たちがそういう伝統文化に知らず知らずに触れていけるようなものを、授業の科目を横断して、そういう枠を取っ払ってプロジェクト・アプローチみたいな形で小学校、中学校、高校がそれぞれの段階でやっていくような、いわゆる教育方法のいろいろな柔軟な考え方というの、要るのかなと思います。

それと後は、今はZoomとかこういうものでつながれますので、学校の中だけでとどまらず、もちろんその学校と近隣地域というつながりもZoomとかいろんなオンラインでできるでしょうし、学校同士のつながりとかいうものも、こういうリモート等を活用しながら、ぜひ今やっている活動等を情報交換できるようなことでつなげられてもいいのかなと思います。

(千委員)

中々この伝統文化を学ぶというのは難しいことだと思うのですが、幼稚園、小学校の小さいときから、どちらかというとか学ばうというよりは肌で感じるようなことが大事なのではないかなと思うのです。

だから小さいときに何も難しいことを教えるのではなくて、人の名前でもいいし、簡単な1行、2行のことを聞いていて、それを大きくなって高校ぐらいになったらしっかりと学ばうというような方がいいのかなと思います。高校生からだ遅いような気がします、高校生が1から始めるというのは。

それともう一つ、この伝統文化フェスティバルはすごいですよね、片山九郎右衛門さんが登場みたいな、本物が出ていらっしゃる。何か舞台鑑賞とか、1つの学校でやるのではなく、京都市内、京都府内で企画して、それでそこに参加したらちょっと特典があるみたいな。それぐらいしないとなかなかみんな行かないと思いますし、学校ごとにやるととてもそれは大変かもしれないので、まとめてそこに2回行ったら何か単位がもらえるではないが、やはりそれぐらいのことをしないと浸透していかないのかなと思います。

こういうことは机の前で勉強することではないので、そういう機会を多く作ってあげるというのが基本かなと思います。それで先ほど申し上げたように学校で一つ一つやっていくのは無理なので、まとめてしてあげたいと思います。

(橋本教育長)

伝統芸能、伝統文化ということに関して申し上げたいと思います。

御紹介がありましたように、伝統文化フェスティバルは、今は一部の学校だけが出ているというお話もありました。私どももできればもっと参加できる府立の高校が増えたらいいかと常々思っている訳です。ただ、島根県の神楽のように、その地域にしっかりと根づいて

いるものは別として、実は古典芸能、伝統芸能に部活動等で取り組んでいる高校というのは、吹奏楽等と違いますが、どの府県でも一部にとどまっているという状況になっております。

その背景には、いろいろお話がありましたように、そうしたものに触れる機会がそもそも少ないということが1つありますし、それとともに指導者の確保とか、備品設備を整えるための予算の問題等も大きいのではないかと思います。ただし、そのようにどの学校でもやっていないだけに、うまくいけば、これは例えばですけれども、全校生徒が80人ぐらしかいない、しかしその半分近くが郷土芸能部というところに属している、民謡で有名な富山県の南砺平高校というのがあるのですが、ここはしっかりと学校の特色として取り組まれているなと思います。

冒頭の挨拶で申し上げましたが、今我々の方では今後の府立高校の魅力向上に向けた検討を進めている訳ですが、生徒にアンケートを取った結果でも、学校を選ぶ要素として部活動の魅力というのは非常に大きかったということもあり、今は府立では邦楽をやっているところもないのですが、邦楽を含めて伝統芸能に係る部活動の取組というのは、今後を考えると学校の特色の大きな魅力の一つになるかなと思っています。そういう戦略があるかなと思います。

ただその際には、特に立ち上げ期、古典芸能等をやっていこうとすると一定の予算が要ります。そうしたときの府の支援というのは必要かなと思います。

それと裾野の問題ですけど、千委員もおっしゃったように、やはり多くの児童生徒に早い時期から関心を持たせる機会を作るというのが大切であろうと思います。冒頭の説明にありましたように、府教委の方で伝統文化、古典に係る体験活動事業というのは実施しているのですが、今は芸術鑑賞事業の方は文化スポーツ部の方で取り組んでいただいておりますので、こうした取組をさらに拡充を図っていただきたいなと思いますし、そうしたものについて我々の方でもしっかりと学校への周知というものに協力していく必要があると考えております。

ただ、藤本委員もおっしゃったように、中々学校の現場は時間的に余裕がないということがありますので、授業で一部を取り組むこととしましても、中々全校で同じように取り組んでいくことは難しいと。そうなりますと教員にいかに関心を持ってもらうかというのが大事かなと思っています。それによっても取組の優先度が変わりますので、そのためには教員に関心を持ってもらえるような教員向けの、ちょっと敷居の低いようなプログラムが考えられたら有効に働くのではないかなと、考えます。

(西脇知事)

今の橋本教育長から紹介がありました富山県の南砺市、実は私の母親のふるさとです。南砺市に合併されて、平村はなくなったのですが、うちの母親は相倉という集落で、私の親戚の全区が世界遺産のところの合掌造り、五箇山のところにあります。私も富山県に知事会で行ったときに、乗車したバス内で聞いたら、ほとんど全校生の過半数以上がその伝統芸

能に入ってまして、極めてレベルも高いということでした。

伝統文化フェスティバルに焦点が当たり過ぎると、若干そこが強くなるのですが、前の文化庁長官と私の意見が一致したのは、私は野球をやっていましたが、甲子園と似ているところがあって、レベルがかなりプロに近いのですが、商売にしてないので純粹さが残っていると。これが魅力じゃないかみたいなことも言っていました。

これは1つの、うまくいっている、全く違う例なのですが、私が4年前に知事になったときに、子育て環境を日本一にするというときに職場づくりをやるということで、時間単位の年次有給休暇の導入をしている企業が、京都は全国の平均よりも低かったのですが、3年間でかなり増え、今は全国平均よりも多くなっており、実際に職場でも従業員の方も皆さん喜んでみたいなきごとがありました。この高校生伝統文化フェスティバルもさることながら、今日も先ほど当初予算について記者会見をしたときに、文化庁が来るのに何を生かすかと聞かれ、京都でそういうことをやり、全国的な文化行政を京都府がリードしていき、それを全国に普及していけばいいと言っています。その一つが地域文化であり、いわゆる生活文化ではないかということを書いて、これからもずっとこういう場だけではなく、アイデアをいろいろ募って文化庁の移転に備えなければいけないのですが、何かこんなことをやったらどうかとか、そういうアイデアがあればぜひ欲しいです。

先ほどの鈴鹿委員のお話の中でも、「ちはやふる」と「あさきゆめみし」が出てきたのですが、もう一つは何といても書道ですね。要するにああいう映画になるようなものがあります。何かそういうような、押しつけと違う、ただやれというのではなくて、そういうものがあつたりとか、何か競争するものがあつたりとか、千委員からは特典があるとか、何かそういうことがあれば非常にいいのではないかなと思っています。また、もう一つは藤本委員が言われたように学校現場は非常に大変なので、こういうアイデアがありますからやってくださいなんて言っても多分絶対に実現しなくて、1校ぐらいだけやったらやりますと言われて終わりということになっても困るので、もっと行政だけではなく、民間企業とかを巻き込んで、ちょっとした教育委員会の学校現場の御協力があれば、後は持続的に動くようなシステムがあれば非常にいいのではないかと。

今日の午前中は裏千家の教授の西村さんに来ていただき、女性活躍について意見を伺いました。教育現場に教えにいったら、普通の授業よりもはるかに文化の授業の方が食いつきがいいというか、ものすごく自由に何でもできるということらしい、という話も紹介していただきました。うまくやれば興味を持っていただけるのではないかなと思っています。次のテーマの生活文化、これはものすごく幅広い話ですので、伝統芸能とかじゃなくて生活文化になるべく子供たちを親しませることによって、何か土台ができればというようなことも思っています。生活文化の学びも含めて、2巡目の意見をよろしくお願いします。

(小畑委員)

生活文化で今おっしゃるような、全国的な何かコンペみたいなものやっっていくという

のは、私はあまりアイデアがないのですが。ただ、そういうものは全国でコンペをして1位になった、2位になったというような類の話もあるかもしれないですが、やはり自分たちの地域に根差した文化というものをそれぞれの地域の人たちが掘り起こして、それを実感して、自分たちにはこんなにすばらしいものがあったんだねと、そういったものを検証していくことが私たちの地域の活性化にもつながっていくというようなことをそれぞれのところで考えていくという、その草の根のような運動というものを巻き起こしていくことがより大事ではないかと思います。

もちろんそれを巻き起こすために全国的なコンペをするというのは、一つの頂点としてあるかもしれませんが、基本的にはそういうことなのではないかなという感じがします。そしてそういうものを自分自身の肌感覚というか、自分自身の体験で小さい頃から感じていると、それは非常に大きな美意識になっていくと思います。

この間も坂東玉三郎の舞台を観ました。あの人はすばらしいと聞いていたのですが、あの人のすばらしさと何か艶っぽさみたいなものというのは、やはりライブで観ないと分かりません。ライブで観るとものすごく分かります。そういうようなことから、生で観ることが必要です。私も子供の頃に親に連れられて歌舞伎を観に行ったことがありました。誰かからチケットをもらったのだと思うのですが、観に行ったが全然面白くなかったです。何を言っているか分からなくて。今でもそのことだけはよく覚えてるのです。だから何かああいうものはものすごく魅力があるから、子供にも非常にその感受性みたいなものを刺激するのです。だからそういうものを生で小さい頃から観るということは非常に大事なことなのだろうと思います。

それと最初のテーマで私が言ったこととの関連でいえば、一つ一つのその文化、あるいは地域の伝統文化とか、そういうものを共有するというのも大事なのですが、そういう文化、あるいはお茶でもお華でも、そういうメジャーなものでもいいのですが、そういうものがどういう歴史の中で生まれて、そしてそれが例えば200年、300年経ってもまだ世の中に受け入れられて価値があるものだと思われて、そして1つの文化として、あるいはビジネスとして発展しているのはどうしてなのだろうか。そういう一つ一つの文化、あるいは自分のところの地域のこういう文化をようやく掘り起こしたけど、何か知らないけど埋もれちゃったよねということがある。どうして埋もれるものと、長い間続いて活気、活力を持っているものがあるのだろうかということをみんなで調べてみて、こういうことなんだとみんなが知って、ではこうすれば続いていくのではないかと、ではこうすれば文化が地域の活力につながっていくのではないかとということを学んでいく。そういうような文化の裏側にあるものを解き明かしていくような、これも教育だと思うのです。そういうことをみんなでPBL的に小学校、中学校、高校でやっていくということが、最初に私が申し上げたようなテーマにつながっていくと思います。いわゆる文化と産業をつなぐ教育というような、意味のある教育につながっていくのではないかと、そういうことも大事ではないかと思っています。

(安岡委員)

生活文化といっても、茶道、華道とか、全国で分かっているようなことから、地域での神輿とか、いろいろそういった風習とは分けなければならないのではないかと思う訳です。その道の千委員がおられる前で言うのも何ですが、大人でも茶道とか華道とかそういう道とつくものに対して若干の敷居の高さがあるという感じがする訳です。

そうやって軽んじてはいけないという頭もあるのでしょうし、そういった中で、子供にそのよさとか魅力というのをどうして伝えていくかというのは、やはりその間口を広くして、先ほど言われたように誰でもが入り込めるような仕組みを作ってあげて、それを幼稚園、保育園、あるいは小学校、中学校、高校に行く段階において極めていくという狭い、最後は極めるというのがやはりその道に対するところだと思うのですが、そういったところで段階的に受入れをするということが非常に大事なのではないかなと思います。

昨日、テレビを見ていたら、筒香選手が、和歌山県に球場を造って、どうしてそういったところで自分が造ろうと思ったのかというと、ドミニカで野球を始めた子供たちが好きに自由に遊んで、それから野球を学んでいけると。指導者があまり手出しをしないという、そういった環境を作りたいということをおっしゃっていたのを思い出して、そういったところも含めて、この京都の中で考えていかなければならないとは思っています。

(鈴鹿委員)

生活文化に関しては親子で学んでいくものかと思います。先ほどからお話が出ていますが、いわゆるお茶だったら茶道、お華だったら華道というよりも、生活文化で今私たちが考えないといけないのは、言い方はあまりよくないのですが、もうちょっとレベルをダウンしたところにあるのではないかと思うのです。

というのは、多分ここにいらっしゃる皆さんが当たり前と思っていることが、もう分からない世代の人が親になっています。私より年下になってくるとそういうことかと思います。お茶も抹茶を飲むということ以前にペットボトルしか飲んだことがない。また、お茶を飲んだことがない。実際に会社に入社してくるような世代でも、急須の使い方を知らないという世代になってきています。

そういう方々が親になっていくので、まずうちに急須もないというところから、どういうところを教えていけないといけないかと、これは親御さんに期待しても、もうそれは分からないことなので、親御さんも一緒にそうなのかというように知ってもらおうというような仕掛けが大事かなと思います。そういう意味では、学校で子供にいろんなことを教えるというのは大事ですが、いろんな文化庁主催のイベントもある中で、そこでの親子イベントというのも本当に大事かなと思います。学校で何かをしたからといって、家にはその道具がないから結局そのまま終わってしまうというのも悲しくて、親子で行ったら、たとえそれが買えなかったとしても、あのときああして入れたお茶はおいしかったねという話ができることが将来につながるのではないかと思います。おいしかったねと家で話して、うちはお金がない

しそんなものは買わないよと言われてしまったら、そこで途切れてしまうと思うので、親子イベントというのは大事だと思います。

また、これはちょっと上の話になるのですが、親子で大事だなと思ったのが、私も娘が3歳ぐらいになってくると、いろんな受験とかの話聞くようになり、特に東京都内の私立の小学校の受験では年中行事とかが本当に大事にされていて、お受験戦争の中で皆さん親御さんも、私もしたことはないんですけど針供養をしましたとか、そういうことも判断されて小学校に入学されているとのこと。

公立学校だったらもっとそれを学校のカリキュラムとしてできるのではないかなと思います。受験のために文化を学ぶというのは、私はどうかなと思うので、それが自然に、千委員が先ほどおっしゃったような、生活の中で肌で感じるものになるというのが一番、それこそが生活文化だと思います。

西脇知事が例をとおっしゃったのですが、例えば、学校のしつらえでしたら、お正月飾りは冬休み明けの始業式のときに、ちょっと日は遅れますけれども見せてあげるとか、鏡餅もそこで見せるとか、学校に1つでいいのでひな人形を飾ってあるとか、そういうしつらえがあるとか、後、また食のことで、今私自身がお菓자에携わっているので余計に思うのですが、例えば給食では、これも遅れてしまうのですが、七草がゆを全員で食べて、これは1月7日に食べるんだよとか、小豆がゆを出すとか、後、また季節に応じたお菓子を出すとか、そういうことができれば理想的だなと思いました。

これを思ったのは小豆がゆについて話したら、私より年上の方でも何それと言われることがかなり多いので、そのぐらいの世代でもそれだったら、生活文化だから家庭でというのは、もう変わってきているのではないかなと感じています。

(藤本委員)

今皆さんのお話をそうだなと思いながら聞いていましたけれども、私もやはり子供が小さい頃から身近に自分の家の生活文化を知ることが、文化と言えるところまではないかもしれないけど、とにかく小さければ小さいほど大事だというように思います。

その中でその生活文化自体が、私の家一つとっても昔やっていたことをどんどんやらなくなってきたというのが現実で、これは日本中で言えることだと思うのです。お節料理しかり年賀状もしかり、いろんなことがどんどん簡略化されていく。これは悪いことばかりではないのですが、やはり今まで大事にしてきた生活の文化がなくなると、もう少し上にある伝統文化というものに大きな影響を与えるのは間違いないことですから、まずは一人一人の家庭のその生活の文化というものが大事にされるということ、そのことは本当に大切だと思います。そんな中で、ではそれをどう伝えていくかという、やはり楽しいとか、これが面白いとか好きという、何かそういう愛着を持てるような対象でなかったら、これは大事なのだからやったらいいよというようなアプローチの仕方では中々、それは分かっているけどそんなことはどうでもいいということにきつになってしまうと思うのです。その辺

りは先ほど知事がおっしゃった野球も、別にプロ野球を目指さなくてもいいのですが、草野球でずっと好きだからやっけていく、忙しいけど好きだからやっけていくという、何かそういうようなものにするために、小さい頃からのことが大事だと思います。意外と小さい子供を持つ家庭というのは、つながるチャンスがたくさんあるのです。やがて小学校、中学校と大きくなればなるほど、地域の中でのつながりも学校の中でのつながりも薄くなるのですが、子供が生まれたての家庭ほど本当にいろいろな人とつながるチャンスがたくさんあると思うので、そういうところをぜひチャンスと捉まえて、何か地域の中でやっけていくとか、それこそ生活だけではないかもしれませんが、文化庁が来るということで、例えばすごく熱心な取組をしている学校とか地域とかに対して、特別賞的にその分野のものすごい第一人者を講師として、文化庁のあっせんでは学校の方に、あるいは地域の方に送っていただくような、そういうようなことを地域の活性化、学校の活性化のために一役買っただけとか、そういう何かしらの仕掛けがあると面白いと思ったりします。

とにかく一家庭だけでは中々難しいので、地域の活性化も兼ねて、地域の中で子育て世代と、それから比較的地域に密着している高齢者の人たち、そういう人たちをうまくくっつける、そういう仕組みづくりを文化庁が来ることの中で行い、京都はすごい、そんなことができるんだというようなことで、一つのいい前例になったらいいと思っています。

それと今はSDGsのことも非常に世界的に取り組むべき課題ですので、この生活文化や伝統文化というのは非常にこのSDGsと絡まっていくテーマでもあると思うので、またその辺りから何か視点があってもいいと思います。

(千委員)

私は茶人ではないというのが、大前提なのですけれども、まさにあれは生活文化だったと思います。今お茶を始める若い人たちが、作法が難しそうとかいろいろおっしゃるのですが、昔の畳の生活をしていたら何でもない普通のことで、ふすまを足で開けたりした人はいないだろうし、普通に立ったり座ったりして、そこから生まれてきているので、今の方は畳の生活をしないからそういうことが何か難しいと思う、煩わしいとお思いになるだけで、それで何か左手か右手かというのも、近い方の手で取るという非常に便利なことなので、やはりお華にしても何にしても、その畳の文化がなくなったというのが、衰退の一つかなと思います。書道だって本当は畳の上でちゃんと座って書くべきものだと思います。

先ほど申し上げたところで言ったら幼稚園等にお茶会をしにいくと、前の年に行ったときから毎日おうちでたてていたという男の子がいて、本当に大人顔負けに上手にたてられる。その後がどうなったかは知らないですが、でも、小学校のときの茶道クラブに男の子が一人でいて、その人は今お茶の先生をしているとか。ですから、小さいときに、先ほど小畑委員もおっしゃいましたが、歌舞伎とかお能がつまらなかったと、それでもいいのだと思います。つまらなかったという意識が大事だと思うし、お茶もただ苦くて、お菓子だけがおいしかったというのでもいいし、大きくなってお茶を飲んだときに、小さいときに飲んだこ

とがあると思ってくれるだけでもいいなと思って、私はその幼稚園に行っていました。だから、先ほど先生方にもそのハードルを低くしてそういう機会を、とおっしゃっていましたが、それより今の小さい子たちが大人になるのを待ったほうが早いと思います。

こういうことは本当に 10 年や 20 年でできることではないので、張り切って何かをしようというのではなくて、こつこつと続けていかないといけないことだと思うので、何しろ小さいときの取組をお願いしたいと思います。

(橋本教育長)

生活文化を盛り込んだ、この回答ですが、生活に根差して長い歴史の中で伝えられてきたものと捉えて、それと地域を結びつけるとすると地域の祭りとか、そういう伝統的な行儀事、あるいは風習等も含む広い意味での地域文化と言えることができるのではないかなと思います。

そう考えると、実はこれは非常に学校教育になじみやすいです。というのは、元々郷土学習ということで、全ての学校の授業の中で取組が進められてますし、例えば宇治市は独自に宇治学ということで、独自教材を作ってかなり熱心に取り組まれて、その取組の一環がさきに紹介のありました宇治田楽等にもつながっていきます。あるいは小畑委員におっしゃっていただきました課題解決型学習、こういうテーマに取り上げやすくて、実際にフィールドワークもしながら探求的な学びもできますので、こういう方向で深めるというのは一つあるなと思います。

それと同時に学校で教えるというのはやはり限られてますので、それ以外の部分、家庭というのもありましたし、社会教育の分野というのは非常になじみやすいと思ってます。これもさきに質疑がありましたが、子供のための地域連携事業で、この取組で実際にいろんなことをやっていますが、地域の方が指導者となって、おじいさん、おばあさんが指導者の役目として異世代交流という形を取る中で、お茶とか太鼓とか様々な昔遊びを学ぶことに取り組んでおられます。

こうしたやり方というのは非常にいいと思いますし、今年度から府教委の方で実施しております京都府地域交響プロジェクトの協働教育の中でも、五節句の伝統文化体験取組というのも、これが全てではなくて、本当にこれはいろんな中の一つでしかないのですが、実際に行われております。

こういうことを考えますと、学校の授業で教えられる時間というのは限られているのですが、教室で入り口として学んだことを社会教育の中で体験も交えながら、もっと広がりのある取組としていく。文化庁移転の話をしましたけど、広く言えば文部科学省かもしれませんが、文化庁と総合政策局とか、その社会教育の取組をもっと融合して、面白い取組ができるのではないかと。恐らく今はあまりないように思いますので、そういうところに可能性があるかなと考えます。

(西脇知事)

ありがとうございました。

私も実は弘法さんに毎月行っていたのです。私は弘法さんはうちのおやじと植木を買いにいくところだと、それでちょっと縁日があるなと思っていたのですが、知事になり、よく勉強しまして、意味もよく分かるようになりました。歴史を学ぶというのは私も比較的好きな方なのですが、子供のときに何かを体験しているというのは非常に大きいというのがありますし、小さいときに経験するというのは非常に重要だと思います。

それから親子でのイベントの話はまさにそうで、今我々が子育て環境日本一の関係でやっている子供の居場所づくりで、例えば亀岡のギャラリーというかなり広い屋内の施設があるのですが、コロナ禍の中でも、平日でも連日予約で満員なのです。それで行って見たら、子供さん2人ぐらいに大人数人で、4人ぐらい来ているのですが、よく見ていたら子供は子供同士で遊んでいて、大人は大人同士で子育ての悩みを言ってみたりとか、後は親子でということ、やはり何か親子でというのは非常に重要かと思っています。

それから生活文化では、和食が世界遺産になったときに、非常にもめたらしいのですが、最後の決め手がお雑煮だったらしいのです。お雑煮を例に出して、日本全国で同じ時期に、いろんなバリエーションがあるが同じ風習をやっているというので、まさに和食が日本全国に広がっているということの証左として認められたということでした。これは実は漆器の話から来たのですが、食洗機普及のために漆器が売れないみたいな話になり、食洗機にかけられないので。だけど、食洗機にかけなくても別に簡単に拭いたら済むのと違うかと言えば、そういえばうちにある漆器なども全部欠けて剥げたりしていますよという話をしているときに、やはりお雑煮だけはおわんでしか食べていないような気がする、いろんなほかの漆器の中でも残っているという、それが実は和食の世界遺産にもつながったみたいな話がありました。ただ、楽しいとか面白いがないと伝わらないというのは間違いないと思います。

3つ目のテーマは、私がずっと問題意識を持っていて書いたのですが、伝統産業の担い手の話で、この担い手づくりの話と生活文化に関係するその需要としての生活と両方あるのですが、生活文化が廃れて需要が落ちているから産業が成り立たないと。産業の方で人手がないから家に届かない。時間は限られているのですが、簡潔にこの担い手づくりについて伝統産業、特にものづくり系のものについて、何か教育現場で連携できるような取組があればアイデアをお願いします。

(小畑委員)

伝統工芸とか伝統産業というのは、伝統文化を支える産業だから、これがなくなると今議論しているような伝統文化そのものが崩壊してしまうので、これは非常に大事なことで、それをその産業として維持していくということは非常に大事なことでしょう。そのためにはやはり担い手というものは大事だと思います。

それでこの産業というのは私もよく勉強していませんが、恐らく一人親方みたいな非常

に零細な事業者がいっぱいあって、それがかんざしを作るのだったらこのネットワークと、何かほかのものを作るのだったらこのネットワークとか、非常にフレキシブルな産業構造になっていると思うのですが、一人親方の零細が多いから、一人親方がいなくなってしまうとその産業、そのサプライチェーンのその部分がなくなってしまうと。昔は3社ぐらいあったのがもう1社しかなくて、そのおじさんだけでやっているというような話をよく聞きますので、そうすると一つでも欠けるとそのサプライチェーンが途切れてしまうからものが作れないということになるので、そういうところの人をどう育てていくかというのは非常に難しい問題です。

それで昔みたいな親方と丁稚、弟子みたいな徒弟制度の中で人を育てていこうとすると、恐らく今はよほど志がある人でないと、そんな世界に入っていくかない。そうすると視点をちょっと変えて、その伝統を守るための伝統産業のサプライチェーンを切らないようにするにはどうしたらいいのかというようなことに切り替えて、それで何十年もかかって手仕事で、肌感覚で作っていたようなものまではいかないかもしれないが、例えばデジタル技術だとか3D、そういう新しい技術をフルに使って、似たようなものを作るということでもいいのではないかと思うのです。そのように少し考え方を改めてこの産業を守っていくと。そしてその人の育て方というのも、何十年も同じことをしながら徒弟制度の中で育てていくのではなくて、新しいデジタル技術等を使いながら新しい基礎を、そういうものにも興味のある若い人を寄せつけて引っ張り込んで、新しいやり方でその技術を継承していく。こういうような新しい、これも産業政策であり教育政策だと思うのですが、そういうような考え方に転換していかないと、これから先、伝統産業というのは続いていかない。全部が続かないことはないけれども、ぶった切れるとものがない。そうすると、ものができなかつたら花街だって成り立たない可能性があるという、そういう危機感を持って技術の継承の考え方を改めていくとか、あるいは本当に一人親方のネットワークの、その産業構造をもう少し集約的な産業構造にしていくとかいうようなことも考えていかなければいけないと思うのです。そういう新しい産業構造になれば、また技術の伝承の仕方も変わってくると、こういうように思います。あまり教育の話にならなくて申し訳ありませんでした。

(安岡委員)

ものに触れ合って、そして興味を持ってその道で生きていこうとするなら、それぞれの諸条件があって、霞を食べて生きていく訳ではないから、そのときに人生をどうしようかと考える訳で、その受入れ側としての魅力ある職業というものの中で、環境整備というのが非常に重要になってくると思うのです。

そういった中で、今は多様性というのが言われていて1社終身ではなくなっている。こういったことを考えると、いろんな価値観を持った人々がこれから増えていく中で、いろんなことに興味を持ってこういう伝統産業とかをやる人も増えてくるのではないかなと。私は結構、楽観的にその辺のところは思っているところです。

(鈴鹿委員)

ちょうど先日、実は日本伝統工芸の近畿展の監査員をさせていただきまして観てきたのですが、実際に観てみると今の生活でも十分これを使いたいと思うものがありました。まず、それに会う機会というのがあったらどんどん使い手も広がって、また需要が生まれたら作り手というのは自然と生まれてくると思いました。

その中で、今ちょうど漆器の話が知事からありましたが、漆の方とお話をしていたら、食洗機が可能なものも漆器はできるんですとおっしゃっていて、それをそのように使ってもらって漆器として認めていって、でもちゃんとしたのでは食洗機は使えないので気をつけましょうという、その経路に合わせて工芸のほうでも歩み寄りが必要ですし、使い手も歩み寄りが両方とも必要と思いました。

ちょっとさきへ戻ってまとめみたいになるのですが、この伝統文化とかは、生活に直結してとなると、深く考えないかもしれないですが、この間外国語教育のことを都道府県の教育委員会で話をしたときに、読み書きができてても考えて書くことができないというのが京都の特徴で出たのですが、語るべき内容がないというのが一番の問題だと思いますし、やはり京都という土地で語るということと文化というすばらしいものがあるので、その部分を、内容をもって語れるというのが、将来的にグローバル化というようにしていく、その自信を持つことで国際人として育っていくというのに必要なことではないかなと思いました。

(藤本委員)

伝統産業、そしてものづくりを担う人たちがしっかりと安定した生活を送れるかどうかというのは、特に京都は財源として、やはり観光というものが非常に大きいですし、それは担い手のある歴史、伝統というものが評価されているからなので、今後、今まで以上に京都が、日本がしっかりと世界の中で存在価値を出していくためには、非常にこれは大事なテーマなのかなと思います。

それで前に、全然違うんですけどドキュメント映画で、作った人の顔が見えるということがすごく大事だし、やはり信頼の置ける人からものを買うという、そういうようなものがやはり根づいている地域は強いという話があったり、この間も職人さんたちが安定するためには、当然職人さんたちから普通の人たちが物を買う。何かネット販売で買うにしても、ちゃんとその職人さんを分かって買うという、そういうような仕掛けづくりといいますか、仕組みというのがとても大事なのではないかというように思うんです。

そうするとやはり行政としても、そういう人たちを本当に見える形で守っているんだと、京都はそういうような仕組みを行政が本気で応援しているんだというようなことをしっかりと手を挙げて、旗を上げないと駄目なのではないかというように思います。

これも前に、もう西脇知事は御存じだと思うのですが、千葉県の流れ山市というところで少子化対策が非常にうまく進んでいるという例がありました。これも議論があったようです。

けれども、子育て世帯に非常に税制で優遇をしたり補助金を出したり、幼稚園、保育園の先生たちにも処遇改善を上乗せしたりすることで、結果的に子供たちが生まれて、結果的に流山市の税収が増えた。そしてそれが増えたことで高齢者への福祉施策も行き届いてきたと、この間のテレビでやっていました。

だから、ぜひその伝統産業に関わるような担い手の人たちには、京都府が税制面でも優遇します、例えば府民税とか固定資産税も優遇しますよというようなことであつたり、京都府民がそういうきちんとしたものづくりをされている方からものを買うときには、例えば京都府民はそれをちょっと割り引きますとか、何かそういうのが見えるような支援をしていくというのも、何かすごく小手先のように聞こえるかもしれませんが、結果的に意欲のある担い手が京都に集まってくれたりすることになるのではないかなと思います。

それともう一つは、今人生 100 年時代なので、若手を育成することももちろん大事だし、学校で教えることも大事なのですが、定年後の高齢者で文化とか自分のセカンドライフを考えているような人たちにも文化の担い手としてアプローチしていく。こういうことでその人たちにも第 2 の担い手になってもらうような、そういう考え方も要るのかなと思います。

(千委員)

どうしてもものづくりの人たちがだんだん減ってきて、ということですがけれども、今おっしゃったように食洗機で洗える漆器だったり、時代とともにこちら側のニーズも変わってくると思うので、それは仕方がないことですし、こういう生活に合うものを必要としていく訳です。ですから少しずつ本物らしいものが失われていくのは残念ではあると思いますけれども、やはり仕方がないかなと思います。

ですけど、本当にその本物を作っている人たちへの支援としては、やはり安定した助成金、それしかないと思います。

冗談みたいな話ですが、呉服屋さんが帯を持ってきて、こういう帯はもう売れないんですと、もうこれは最後の 1 本ですというので買う訳です。そうしますとしばらくして、これは最後の 1 本ですと、はいはいと言って聞き流すのですが。だからただ中間搾取させてはいけないので、やはり作り手に直接何かあげるみたいなものがないといけないと思うのですが、やはりそれはお金です。

(橋本教育長)

実は私の娘が京都府の陶工訓練校で 1 年間、絵付けを習っていましたので、割とこの業界というか厳しさというのはよく知っているのですが、労働環境等もかなり厳しいですから、本当に好きでないと中々その道で担い手として生きていくというのはしんどいかなと思います。

それで何とかそういう構造的な問題を改善しようとする、千委員のようにお金という

のか、もう一つはやはり知事もおっしゃったように需要をどう増やしていくか。需要を増やすことで担い手づくりにもつながっていくのではないかなと思いますし、そのためには、今日のテーマはずっとそうですけれども、子供のうちにすばらしい伝統工芸品に触れる機会を作っていくというのは、やはり有意義だろうなというように思います。

ただ、絵画等と比べますと、これは私の感覚かもしれませんが、伝統工芸品というのは本物を見ても中々そのよさというのは分かりにくいかなと思います。私も例年、高島屋で開催される日本伝統工芸展に出席して、作品を一つ一つみんな見せてもらっているのですが、作品自体の価値が分かりやすいものもあるのですが、分かりにくいものも結構ありまして、どうかしたら裏返して値札がついているものがある、それを見て初めて価値に気がつく、そういうこともあります。

ただし、その作品と併せて制作しているところをビデオで映しているというのがあるのですが、その制作風景を見ますと高度な技術とか、その手間暇というのがよく分かって、それを見ると同じものが今度は価値が高まって見えるという、そういうことが私自身の経験の中でも結構あります。

そういうことからすると、どういうことが子供たちに訴えかけるのにいいのかなという、これは学校の先生は中々教えられませんので、本物の制作者、あるいは京都に伝統工芸大学校もありますので、そういったところで学んでいる学生等に出前授業の形で学校に来てもらって、制作風景等の動画も使いながらその場で作品を見せて説明をしてもらう。あるいは作品に実際に触れてもらえるものなら触れてもらう、こういう機会があるとかかなり子供たちの感じ方というのも変わるのではないかなと思います。

(西脇知事)

西陣織等の今の非常に細分化された工程とかも、いろんな全てのシステムは最盛期に富の分配がされたときに出来上がっているシステムで、それだけの合理性があったと、それが今はどう変わるかと。

それから今我々が取り組んでいるのは西陣織と友禅と丹後織物の3産地連携で、海外へグローバル展開しようとしています。戦前には絹織物の絹というのは、日本の輸出の非常に重要な産業でした。日本はしばらく人口減少が続きますので、やはり稼ぐというためにも海外のマーケットをとということで、行けていないのですが、2年以上前に、上海に京都ハウスというのを造っていて、非常に評判もよくて売れ行きもいいですし、インドのサリーを友禅でということで、経済センターで展示会をやっています。すばらしいですし、今の駐日のインド大使の御夫妻も二子玉川のライズでやった折に来ていただきましたが、配偶者の方が非常に着物に興味があるようでして、友禅染のサリーにすごく感動していただきまして、コロナが明けたら当然輸出をやるとか、マーケットを作りながらということも重要なのかなと思います。

小さい子はみんなものを作るのが好きなのですが、いつの間にか忘れてしまいます。もの

づくりに向いている人も絶対にいるはずなので、そういう芽が摘まれないようにしていく
ということは、ぜひとも教育現場で工夫ができたらと思っています。

時間になりまして、こつこつもやりますが、急いでいるところもございます。京都の活力
なり魅力の源泉が文化であることは間違いがないので、今後とも教育現場と我々ときちん
と連携してやっていきたいと思えます。御指導よろしく申し上げます。